

委員会報告

表紙写真の選考を終えて

学会誌企画・編集委員会

学会誌第94巻の表紙写真を募集（テーマ：農業（水利）施設・構造物とそれらに支えられた農地・地域の景観など：現代の最新技術と苦労が垣間見える造形美・用の美など、2025年9月30日締切）したところ、37点の応募がありました。10月22日に審査委員会（委員長・柳本尚規東京造形大学名誉教授）を開催し、12点を選定したので、ここに報告します。

学会誌企画・編集委員会では、学会誌第95巻（2027年発行）も皆さまからの応募写真で表紙を飾ることとし、表紙写真を募集しています。

募集の趣旨および応募方法の詳細は、本誌71ページをご覧ください。たくさんのご応募をお待ちしております。

講評

柳本 尚規（東京造形大学名誉教授）

農業施設や構造物は、科学的知見と技術の結晶として築かれたものだ。しかし人の眼差しから見れば、それらはまるで寡黙で忍耐強い人間のように映る。こうした視線が注がれることで、単なる施設や構造物は〈景色〉〈光景〉〈風景〉〈景観〉へと変容し、私たちの記憶や感情に働きかける存在となる。対象を見つめるとき、私たちは無意識のうちにこれらの言葉を使い分けているようだ。

今年もまた、多様な感情のこもった視線によって、

施設や構造物の姿を見せてもらった。その中で改めて感じたのは、気持ちを包み隠さずに写された写真こそが、もっともリアルな存在感を放つということだ。〈景色〉〈光景〉〈風景〉〈景観〉という視点は、言わば対象を照らすための光のようなもの。視線の方向が定まることで、施設や構造物のかたちや佇まいが、より深く掘り下げられていく。

北から南まで、人の暮らしがある場所には、必ず「農業用水」や「生活用水」が存在しているはずだ。それらを導く施設群の多様な姿を、もっと見たいという思いが強まっている。人の数だけ視線があり、その視線の数だけ、施設や構造物の存在感もまた豊かに広がっていくのだろう。

第94卷表紙写真入選作品

1号



海の中にできた畑 成山新田ものがたり
(合田 弘)

海と畑が共存する静かな風景。

成山新田は瀬戸内海に面し、三方を海に囲まれた広大な干拓地。まさに「海の中に生まれた畑」。海に連なって、人参栽培のビニールトンネルが遙か先まで続く景色は、見たことのない新しい波の海があらわれたかのようだ。

苅屋沖は波が荒く、堤防の維持にはさまざまな困難があったようだ。トラックもブルドーザーもない時代、人々は鍼と荷車、もっこを使って、粘り強く海に抗い陸を築いてきたことだろう。そしていま、ここは兵庫県最大の大根・人参の産地となった。なかでも「御津の大根」は柔らかく甘みがあり、冬の食卓には欠かせない存在だとか。自然とのせめぎ合いが、こうした野菜を育むから源になったのだと想像できる。

海の畑の景色は、人の意思の記憶そのもの。地域のアイデンティティとしても息づいているようだと教えてくれる。

2号



地域をまもる水物語 車池
(合田 弘)

池は静かに水をたたえながらじっとその役割を果たす時を待っているようだ。

兵庫県たつの市揖西町新宮に位置する「車池（くるまいけ）」は、地域の農業用水を支えるため池のひとつだが、その存在は水源としての機能を超えて地域の景観や生態系にも静かに影響を与えている。だから自然環境の一部として保全され、湿原・池塘（ちとう）としても登録されているのだ。

堆積した泥炭層の隙間に水が涵養されることで生まれる＜池塘＞は、周囲とは隔離された環境をつくるそうだ。そして独特的な生物相を育む。だからさまざまな物語を生んできた。

風いだ水面、冬の弱い光…池の饒舌さが巧まずして表された写真である。適切なアングルがこの池の歴史を見るものの頭の中に紡ぎ出す要因になった。

3号



西播磨の疏水・河東（東郷）頭首工
(合田 弘)

西播磨の疏水と「河東頭首工」は、揖保川水系の水利史の中核をなす存在だ。揖保川の清流と山並みに囲まれた穏やかな景色も形成してきた。

この施設は、揖保川から安定的に農業用水を取水し左岸側の田畠へ供給する。左岸には魚道も設けられ、下流から遡上する魚類の生態系にも配慮するという、自然との調和に注意した重要な役割を担っている。

周りには桜の木の広場が整備されていて、地域住民の憩いの場、季節を愛する場として親しまれているそうだ。桜に囲まれることによって施設も命を吹き込まれてともに生きる存在になっているのかもしれない。

硬い施設にも気持ちがあるかのような、一種擬人化した感覚を人々に生みだすかもしれない。写真はそうした新しい風景が立ち上がりてくる様を示しているようだ。

4号



二度の大震災に見舞われた中能登農道橋
(藤井 修)

構造美と自然の響き合う様子がずっと伝わってくる。景色を胸いっぱいに吸い込んで味わっているような作者の気持ちが伝わってくるようだ。

穏やかな七尾湾と能登島の自然を背景に、斜張橋がまるでハーブのように優雅な姿を見せている。愛称「ツインブリッジのと」は、そのケーブル配置がハーブ型で、双子のような美しいシンメトリーを持つことに由来するという。

橋上からは七尾湾や能登島の島影が一望できるだろう。とくに夕暮れ時には、空と海が溶け合うような眺望が広がり、「絵画のよう」と評されるとか。

中島町と能登島を結ぶ全長620メートルのこの農道橋は、二度の大震災に見舞われながらも、致命的な損傷を免れた。凜とした姿には、強靭さへの自信、地域を支えるものとしての誇りも漂っていると感じられる。

5号



つなぐ棚田遺産 望海田鳥の棚田
(合田 弘)

棚田の遠望一静けさの中に灯るキャンドルの列が、風景と記憶をつなぐ装置として浮かび上がっている。

リアス海岸に沿った若狭湾沿岸部は平地が少なく、人々は古くから山の斜面を切り開いて田を築いてきた。その中でも田島の棚田は、長い歴史を持つ場所として知られている。百人一首にもゆかりがあるとされ、平安末期に詠まれた歌の舞台として伝えられている。百人一首には「場所の記憶」を重視して選ばれた歌が多く、田島にも歌人が足を運んでいたようだ。古代から朝廷の食料供給地でもあったようだから。

自然の地形や気候と人々の営みが長年にわたって交錯し、独自の景観を形づくってきた場所だ。棚田はその象徴的存在。キャンドルには、そうした文化的景観を次世代へと手渡したいという地域の願いが込められている。

6号



農村を潤す美しい水紋
(佐々木貴紀)

大分県竹田市にある農業用水のための堰堤。「ダムの女王」「森の貴婦人」とも呼ばれて、その景観と構造美が「日本一美しいダム」と称されている。水流の様子は四季折々の風景と調和し、春の桜・夏の緑・秋の紅葉・冬の雪景色が水面に映える…。流れれる水が白いレースのカーテンのようだ。

その美しさは、地盤の弱さに対応するために設計された、水流分散・減衰の技術的工夫から生まれたものだ。水は堰堤の壁面を絹糸のように滑らかに流れ落ち、光を受けると白いレースのような模様を生み出す。まさに機能美の結晶だといえる。

このダムでは設計者（大分県技師 小野安夫）が明示されている。そういう例はあまり多くないが、設計思想や美意識が構造物の形状や機能に強く反映されている場合は、設計者の名前をあきらかにして歴史や文化の中で語り継いでゆくことがあるようだ。

7月



府営農村総合整備事業「岸和田丘陵地区」
(大阪府)

丘陵地の農整備エリアでは、葉物野菜を中心とした営農が始まっている。背後には住宅地や工場が広がり、「農と都市のモザイク的風景」が立ち上がりつつある。写真は、農業振興と地域活性化を目的とした大規模な土地整備プロジェクトの出発点をとらえている。その風景が新たな期待を呼び起こす。

たとえば、この土地がどのような枝葉や花をつけていくのか—そんな想像もまた、ひとつの期待だ。その過程では、思いがけない要素がふと入り込んで風景に新たな表情を添えることもあるかもしれない。しかし、計画とは配置されたものがやがて自然に動き出すことを信じる営みではないかと思えばそれも理にかなっている…。

写真には、まだ見ぬ「つづく」への予感が、いくつも織り込まれている。定点観測のように、これから変化をはやく見届けたくなってくる。

8号



森の中に秘められた造形美のある
円形分水工

(藤井 修)

森にひっそりと佇む円形分水工。その真上から捉えた写真は、まるで神の視点からのようだし、造作の幾何学的な美も鮮やかに印象づける。浮かび上がらせている。ドローンによる撮影だろうか、視点の高さがこの構造物の造形美と機能性を同時に可視化するようだ。

この分水工は、かつて水争いが絶えなかった佐賀川流域の農業用水を公平に分けるために築かれた。

中央から湧き出た水は円周に沿って均等に流れ、仕切り板によって面積比で分配される構造は「見える公平性」を体現する。日本の農業に特有の、少量でも正確な水分配を可能にする技術だといわれる。

まさに大地につくられた芸術作品。写真は、制度と風景が交差するこの施設の存在感を充分に味わわせてくれる。

9号



彩(いろどり)をつくる
—道前道後用水・坂瀬川承水堰—
(近田昌樹)

仁淀川は愛媛県に入ると面河川（おもごがわ）と呼ばれるようになり、そこから取水した水を久万高原町を経て松山平野へ導く坂瀬川承水堰は、山間部から平野部へと水を導き地域の農業と生活を支える重要な施設だ。

水面に映る施設のリフレクションが美しい。作者は光の揺らぎに没頭し、現実が反転・変容するもうひとつの次元、幻影に吸い込まれて遊んでいるようだ。

水面もブルーやエメラルドグリーンに染まっているのは、仁淀川水系特有の神秘的な色彩を引き継いでいるのだろう。

写真は、承水堰という機能的な施設の景色に、風景としての価値を与えている。光と水が織りなす現象が、施設を詩的に浮かび上がらせているのだ。

10号



段々畑の一本の道
(近田昌樹)

宇和海に突き出た鉤状の半島には、いくつもの浦が点在し、半農半漁の暮らしが今も息づく。その中部、明越口付近の斜面に築かれた畠地は、耕地の乏しいこの地における生存の知恵の結晶だ。半島の先端には、国的重要文化的景観に選定された水荷浦の段畠も控えている。

写真に写るのは、石積みの斜面にへばりつくように設置されたモノレールと農具の数々。まるでピラミッドをよじ登るかのようなその配置は、日々の作業の過酷さを物語る。

無骨で素っ気ない風景の中に、光と影が織りなす陰影が生まれ、自然と人との関係性を浮かび上がらせている。日常の積層をただそこにあるものとして指し示しているのだが、その迫真性が大きい。

11号



完成間近の大切畠ダム
(農業用ダム保全管理研究会現地調査より)

2019年に着工した新ダム工事は順調に進み、2016年の震災から10年越しの復旧がまもなく実現する。写真は、堤体の盛土工を終え、最終段階の石礫による表面被覆工が進む様子だ。かつてシネマスコープで味わった、まるでその場にいるような臨場感と風景の壮大さがふと蘇る。臨場感とは、意味づけられた世界ではなく、生の現実に立ち会う感覚だ。

堤体の斜面には、生の時間がゆっくり堆積していく様が思い浮かぶ。現代の暮らしでは、時間の経過を実感する機会が減ってしまった。かつて街中で「時間の積層」を感じさせてくれた工事現場も、今では仮囲いの向こうに姿を消した。私たちは、目に見える変化を通して季節や時間を感じてきた。だから、その喪失は時間の感覚そのものの喪失に近い。

だが、この臨場感に満ちた写真は、身体に眠る時間の感覚を呼び覚ましてくれる。かつて工事現場に立ち止まり、ただ見入っていた記憶が蘇ってくる感じだ。

12号



上河原堰堤

(登尾太郎)

上河原堰堤は、江戸初期に築かれた多摩川から引く二ヶ領用水への取水口だ。少し下流の宿河原堰とともに地域の農業と暮らしを支えてきた。いまは加えて環境用水の役割も果たす。自然環境や地域の景観・文化を守り育てるための水利用だ。つまり、川崎領と稻毛領という二つの幕府直轄地にまたがるこの用水路は、歴史と制度の記憶を今に伝える。

写真に写る堰堤は、夕陽に照らされることで塔のようなシリエットが際立ち、機能と美が融合した景色を生み出す。調布市側には魚道付き固定堰、川崎市側には洪水吐ゲート3門と管理橋が設けられ、左右非対称の構造が造形的な緊張感を生むようだ。

この景色は、人が水とどう折り合い、環境にどう調和してきたかを想像させる動機になるかもしれない。光と構造の交差点で捉えた美しい写真が、人が自然とどのように折り合ってきたか、その歴史を想像させるのである。